



下柴の彼岸獅子

下柴の彼岸獅子は、部落に伝わる古文献によると、天正二年（一五七四）悪疫が流行し、医療はもちろんもろの祈禱をおこなってもおさまらなかつた。そのとき異人があらわれ、その言葉どおり神明に祈り、獅子舞をおこなったところおさまったことから、以来、毎年春の彼岸七日間の間、獅子舞を行うようになったのだと伝えられている。

舞は、太夫獅子、雄獅子、雌獅子の三頭が、腰につけた小太鼓を打ちながら囃子方の笛、太鼓に合わせて踊るものである。舞の種類は、打ち込み 棒舞 弓くぐり 幣舞 芝かくし 山おろし 雄獅子舞 雌獅子舞 太夫獅子舞 ばち舞 雌獅子かくし などがある。

なお、下柴の彼岸獅子の元祖と言われている古橋覚太夫の墓というのが、部落の北にある安楽寺墓地に残っている。



所在地 関柴町下柴
 指定年月日 昭和六十二年三月二十七日